

後藤 潤, 後藤 昇 (著)

脳血管障害の解剖学的診断

宮口 英樹

(広島大学大学院, 作業療法士)



存在感のある専門書である。そういう書籍は、著者の深い経験に基づく知識やアイデアが積み重なって、存在感を自ずと醸し出していることが多いようである。頁をめくって著者が書かれた「はじめに」を目にしたとき、その理由がわかった。本書は、著者の一人、後藤 昇氏が執筆にかかわった1971年(昭和46年)の『脳・脊髄血管の解剖』から実に40数年の歴史をもつものである。その重みは、さらにページをめくった「歴史」の部分に綴られている。

本書をさっそく臨床で活用することができた。ある症例の出血部位について、責任血管とその分枝がどのように影響するのかを知りたいと思っていたところ、第Ⅰ部の「脳血管障害の病理学」がまず目に飛び込み、知りたい頁に容易にたどりついた。そして、何より目を引いたのは症例概略があたり前のように記載されていたことである。「そうか、この本は脳血管障害が臨床症状に及ぼす影響を解説しているのだ」と自然に思えた

のである。OTも経験を重ねていくと、視床出血や被殻出血等と診断名は同様であるが臨床症状やその後の経過が異なる対象者が少なくないことを知っている。未勉強のころには、それを重症度や個性という理由で済ませてしまっていたことを反省させられる。丁寧に知識を重ねることが、対象者に無理をさせない、質の高い作業療法を提供することにつながるのだということをあらためて認識させられる。

本書は、序説とⅢ部で構成されている。日常、本書のタイトルに含まれる解剖学的という文字に触れると、自ずとに少々敬遠したい気分になるのであるが、それは杞憂であった。活用する立場になってみると、先に述べた第Ⅰ部から頁をめくって、必要に応じてより詳細な部分(第Ⅱ部 脳・脊髄血管の解剖学、第Ⅲ部 症例集)へと自然に思考が進む感じである。目の前の対象者に最良のかかわり方をしたいと思うなら、まず症状がどのような原因で生じているのかを

知ろうとするだろう。そうしない対象者とかかわるのは、下調べなしに海外に出かけるようなことに等しいと思う。本書の内容を理解するためには、神経解剖学的な基礎的知識が必要であるが、そのために多くのイラストや写真、画像が手助けをしてくれる。

近年、ニューロリハビリテーションの分野で脳の可塑性に関する研究が相次いで報告されるようになった。この学際的分野は、作業療法で重視されてきた意味のある作業の有用性をヒトの脳の可塑性からも説明できる可能性を示している。本書は臨床の最前線で働くセラピスト、学生、教員、研究者を問わず、使用する人々の求めるレベルに応じて答えてくれるだろう。ぜひ、手元に置いておきたいと思う1冊である。

〔A4判 420頁 25,000円+税〕
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357